

1 作 物

項 目	作 業 内 容
(1) 麦の栽培 管理	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none">○麦の栽培管理○水田の土づくり <p>ア 湿害対策</p> <p>1か月予報では、気温は平年並、降水量は平年より少なく、日照時間は平年より多い見込みである（11月13日高松気象台発表）。降水量は平年より少ない予報であるが、今後の降雨に備え、ほ場内の明きよ整備が不十分なところは2～3mごとに排水溝を設置し、排水溝が崩れている場合は補修する等により、ほ場外への排水を促し湿害防止に努める。</p> <p>イ 早まきした麦の追肥</p> <p>11月上旬までには種したはだか麦は生育が旺盛となり、12月ごろから窒素欠乏による黄化症状（写真1）が発生し、生育が停滞して収量が低下することがある。対策として窒素成分で10aあたり2kgを、12月中・下旬と1月中・下旬ごろにそれぞれ施用し、「ハルヒメボシ」では葉色がSPAD値40を下回らないようにする。</p> <p>ウ 土入れ・麦踏み</p> <p>土入れは、根際の乾燥を防止するとともに明きよの補修を兼ねた湿害防止策となる。麦踏みは根の浮き上がりを防ぎ、根張りを良くするとともに、徒長や過繁茂を抑え、茎葉を硬くして倒伏を防止する効果がある。</p> <p>作業は本葉3～4葉期ごろの土壤が乾いている時に行う。早まきした麦では年内に必ず1回は実施し、2回目以降は10日以上の間隔を空けて実施する。土入れと麦踏みを合わせて行うときは、必ず土入れを先にする。</p> <p>エ 雑草防除</p> <p>は種直後の大雨や、早播きした麦では、年内に除草剤の効果が低下する恐れがある。このため、後発雑草の発生が見ら</p>



写真1 はだか麦の黄化症状

項目	作業内容
(2)水田の土づくり	<p>れたら、葉齢の小さいうちに占有草種に効果のある茎葉処理剤を散布する。</p> <p>オ 晩まき栽培のは種 はだか麦、小麦ともにやむを得ずは種が遅れ12月となった場合は、は種量を増やす。ドリルまき栽培での10aあたりのは種量の目安は、適期は種では8kgであるが、地温の低下により苗立率が低くなるため、11月25日以降は5日遅れるごとに1割ずつ增量する。</p> <p>ア 有機質資材の施用 腐植や地力窒素の増加を目的に、堆肥等の有機質資材を施用する。施用後は耕起して土壤中にすき込み、分解を促す。なお、堆肥を多量施用すると、次年の水稻が生育過剰となることがあるので、基肥の窒素施肥量を減らす。 生わらは収穫後、厳冬期までにすき込むことで腐熟が促進され、水田の肥沃度の向上や次年度の水稻の根腐れ防止に効果がある。生わらをすき込む前に石灰窒素(10aあたり20~40kg)等を施用することで、微生物による分解が促進される。</p> <p>イ 反転・深耕等の励行 冬季の休耕田でプラウ等による反転・深耕を行うと、作土層の拡大や微量要素の作土層への移行が図られ、次年度の水稻の生育が良好となる。 水田雑草に対しては、種子を土中の深層部に埋め込んだり、難防除雑草のクログワイ(写真2)、オモダカ等の塊茎を掘り起こし寒風にさらしたりすることで、翌年の雑草の発生を減らす効果が期待できる。</p> <p>ウ スクミリンゴガイ対策 スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)に対しては、トラクタの走行速度を遅くPTO回転を速くし耕うんすることで翌年の発生密度を減らす効果が期待でき、耕種的防除として有効である。</p>



写真2 クログワイ